日本古典全書

萬葉集 三

監修
新村出　高木市之助　久松潛一
山岸德平　小島吉雄

萬葉集

三

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

佐伯梅友（さへきうめとも）
明治三十二年埼玉縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京教育大學名譽教授。大東文化大學教授。主―著萬葉語研究、源氏物語新抄、古今和歌集等。

藤森朋夫（ふぢもりともを）
明治三十一年長野縣生。昭和四年東北大學國文學科卒業。東京女子大學教授を經て大東文化大學教授主著―提中納言物語新釋、萬葉集研究書誌、近代秀歌等。

石井庄司（いしゐしやうじ）
明治三十三年奈良縣生。昭和三年京都大學國文學科卒。業東京教育大學教授を經て東海大學教授。主著―國文學と國語教育、國語科教育法案等。

日本古典全書
『萬葉集』三　佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司校註
昭和二十八年三月二十五日初版發行
昭和四十二年六月二十日第六版發行
印刷所　明善印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・北九州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）
定價　四二〇圓

目次

本文

〔訓〕

巻第十……三
春雑歌……三
一八一二　雑歌七首
一八一九　鳥を詠める十三首
一八四三　霞を詠める三首
一八四六　柳を詠める八首
一八五四　花を詠める二十首
一八七四　月を詠める三首
一八七七　雨を詠める一首

〔原文〕

巻第十……一三
春雑歌……一三
一八一二　雑歌七首
一八一九　詠鳥十三首
一八四三　詠霞三首
一八四六　詠柳八首
一八五四　詠花二十首
一八七四　詠月三首
一八七七　詠雨一首

一八七八　川を詠める一首
一八七九　煙を詠める一首
一八八〇　野遊四首
一八八四　舊りにしを歎く二首
一八八六　逢へるを懽ぶ一首
一八八七　旋頭歌二首
一八八九　譬喩歌一首
春相聞……九
一八九〇　相聞七首
一八九七　鳥に寄する二首
一八九九　花に寄する九首
一九〇八　霜に寄する一首
一九〇九　霞に寄する六首
一九一五　雨に寄する四首
一九一九　草に寄する三首

一八七八　詠川一首
一八七九　詠煙一首
一八八〇　野遊四首
一八八四　歎舊二首
一八八六　懽逢一首
一八八七　旋頭歌二首
一八八九　譬喩歌一首
春相聞……一二九
一八九〇　相聞七首
一八九七　寄鳥二首
一八九九　寄花九首
一九〇八　寄霜一首
一九〇九　寄霞六首
一九一五　寄雨四首
一九一九　寄草三首

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

一九二三　松に寄する一首
一九二三　雲に寄する一首
一九二四　蘰を贈る一首
一九二五　別を悲しむ一首
一九二六　問答十一首
夏雑歌……一四
一九二七　鳥を詠める二十七首
一九六四　蟬を詠める一首
一九六五　榛を詠める一首
一九六六　花を詠める十首
一九七六　問答二首
一九七八　譬喩歌一首
夏相聞……一七
一九七九　鳥に寄する三首
一九八二　蟬に寄する一首

一九二三　寄松一首
一九二三　寄雲一首
一九二四　贈蘰一首
一九二五　悲別一首
一九二六　問答十一首
夏雑歌……一三四
一九二七　詠鳥二十七首
一九六四　詠蟬一首
一九六五　詠榛一首
一九六六　詠花十首
一九七六　問答二首
一九七八　譬喩歌一首
夏相聞……一三七
一九七九　寄鳥三首
一九八二　寄蟬一首

一九八三　草に寄する四首
一九八七　花に寄する七首
一九九四　露に寄する一首
一九九五　日に寄する一首
秋雜歌……一九
一九九六　七夕（たなばた）九十八首
二〇九四　花を詠める三十四首
二一二八　鴈（かり）を詠める十三首
二一四一　鹿鳴（しか）を詠める十六首
二一五七　蟬（ひぐらし）を詠める一首
二一五八　蟋蟀（こほろぎ）を詠める三首
二一六一　蝦（かはづ）を詠める五首
二一六六　鳥を詠める二首
二一六八　露を詠める九首
二一七七　山を詠める一首

一九八三　寄草四首
一九八七　寄花七首
一九九四　寄露一首
一九九五　寄日一首
秋雜歌……一三九
一九九六　七夕九十八首
二〇九四　詠花三十四首
二一二八　詠鴈十三首
二一四一　詠鹿鳴十六首
二一五七　詠蟬一首
二一五八　詠蟋蟀三首
二一六一　詠蝦五首
二一六六　詠鳥二首
二一六八　詠露九首
二一七七　詠山一首

二二七八　黄葉を詠める四十一首
二二二九　水田を詠める三首
二二二二　河を詠める一首
二二二三　月を詠める七首
二二二〇　風を詠める三首
二二二三　芳を詠める一首
二二二四　雨を詠める四首
二二二八　霜を詠める一首
秋相聞……三八
二二二九　相聞五首
二二四四　水田に寄する八首
二二五二　露に寄する八首
二二六〇　風に寄する二首
二二六二　雨に寄する二首
二二六四　蟋蟀に寄する一首

二二七八　詠黄葉四十一首
二二二九　詠水田三首
二二二二　詠河一首
二二二三　詠月七首
二二二〇　詠風三首
二二二三　詠芳一首
二二二四　詠雨四首
二二二八　詠霜一首
秋相聞……一五六
二二二九　相聞五首
二二四四　寄水田八首
二二五二　寄露八首
二二六〇　寄風二首
二二六二　寄雨二首
二二六四　寄蟋蟀一首

二三六五　蝦に寄する一首
二三六六　鴈に寄する一首
二三六七　鹿に寄する二首
二三六九　鶴に寄する一首
二三七〇　草に寄する一首
二三七一　花に寄する二十三首
二三九四　山に寄する一首
二三九五　黄葉に寄する三首
二三九八　月に寄する三首
二三〇一　夜に寄する三首
二三〇四　衣に寄する一首
二三〇五　問答四首
二三〇九　譬喩歌一首
二三一〇　旋頭歌二首
冬雜歌……四五

二三六五　寄蝦一首
二三六六　寄鴈一首
二三六七　寄鹿二首
二三六九　寄鶴一首
二三七〇　寄草一首
二三七一　寄花二十三首
二三九四　寄山一首
二三九五　寄黄葉三首
二三九八　寄月三首
二三〇一　寄夜三首
二三〇四　寄衣一首
二三〇五　問答四首
二三〇九　譬喩歌一首
二三一〇　旋頭歌二首
冬雜歌……一六四

二三二二　雑歌四首
二三二六　雪を詠める九首
二三二五　花を詠める五首
二三三〇　露を詠める一首
二三三一　黄葉を詠める一首
二三三二　月を詠める一首
冬相聞……四七
二三三三　相聞二首
二三三五　露に寄する一首
二三三六　霜に寄する一首
二三三七　雪に寄する十二首
二三四九　花に寄する一首
二三五〇　夜に寄する一首
巻第十一……五一

二三二二　雑歌四首
二三二六　詠雪九首
二三二五　詠花五首
二三三〇　詠露一首
二三三一　詠黄葉一首
二三三二　詠月一首
冬相聞……一六六
二三三三　相聞二首
二三三五　寄露一首
二三三六　寄霜一首
二三三七　寄雪十二首
二三四九　寄花一首
二三五〇　寄夜一首
巻第十一……一六九

古今の相聞往來の歌の類の上……五一
二三五一　旋頭歌十七首
二三六八　正に心緒を述ぶる歌百四十九首
二五一七
二四一五　物に寄せて思を陳ぶる歌二百八十二首
二六一九
二五〇八　問答の歌二十九首
二八〇八
二八二八　譬喩歌十三首
卷第十二……九一
古今相聞往來の歌の類の下……九一
二八四一　正に心緒を述ぶる歌一百十首
二八六四
二九五一　物に寄せて思を陳ぶる歌一百五十首
二九六四
三一〇一　問答の歌三十六首
三一二一
三一二七　羈旅に思を發す歌五十三首
三八〇　別を悲しめる歌三十一首

古今相聞往來歌類之上……一六九
二三五一　旋頭歌十七首
二三六八　正述心緒歌百四十九首
二五一七
二四一五　寄物陳思歌二百八十二首
二六一九
二五〇八　問答歌二十九首
二八〇八
二八二八　譬喩歌十三首
卷第十二……二〇七
古今相聞往來歌類之下……二〇七
二八四一　正述心緒歌一百十首
二八六四
二九五一　寄物陳思歌一百五十首
二九六四
三一〇一　問答歌三十六首
三一二一
三一二七　羈旅發思歌五十三首
三八〇　悲別歌三十一首

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

萬葉集

三

佐伯梅友
藤森朋夫
石井庄司

(一)「あめ」の枕詞。
(二)奈良縣磯城郡香具山村にある香具山。
(三)上三句は「おほほし」の意で「おほに」を出す序。
(四)いいかげんに思ふならば、歩き難い道を難儀しながら來ようかい。
(五)「まき」といふための枕詞。→一〇九三
(六)「霞たなびく」にかかる。
(七)木の葉をおしなびけて。霞の深いさまである。→一〇一〇
(八)夕にかかる枕詞。→四五
(九)獵師のもつ弓といふ意でかかる枕詞。弓月が嶽は→一〇八七
(一〇)朝妻といふ山名から用事でちよつと他所へ行くといつた女を思ひ出してゐるのである。
(一一)奈良縣南葛城郡葛城村大字朝妻の山。金剛山の前山。
(一二)あの子を呼ぶ言葉として口にかけるのに宜しき意で「朝妻」の妻にいひかけた序。
(一三)平地に面した部分が崖になつてゐるのをいふ。

萬葉集卷第十

春雜歌

一八二三 (一)ひさかたの天(あめ)の香具山(かぐやま)このゆふべ霞たなびく春立つらしも
一八二三 (二)巻向(まきむく)の檜原(ひはら)に立てる春霞(はるがすみ)(四)おほにし思はばなづみ來めやも
一八二四 古(いにしへ)の人の植ゑけむ杉が枝に(五)霞たなびく春は來(き)ぬらし
一八二五 子らが手を巻向山(まきむくやま)に春されば木の葉(こ)しのぎて霞たなびく
一八二六 (八)玉かぎる夕さり來れば獵人(さつびと)の弓月(ゆづき)が嶽に霞たなびく
一八二七 (一〇)今朝(けさ)行きて明日(あす)は來(こ)むといへこしがたに朝妻山(あさづまやま)に霞たなびく
一八二八 (一二)子らが名にかけの宜しき朝妻の片山(かたやま)ぎしに霞たなびく

右は柿本朝臣人麿の歌集に出づ。

鳥を詠める

（一）静かに動きたなびくさま。
（二）青柳の枝を口にくはへて。
（三）我が背子を越させるなの意で巨勢にいひかけた。巨勢の山は↓五四
（四）夜の更けぬうちに。
（五）朝のゐで。朝川、朝庭など同じいひ方。ゐでは、流水を堰きとめるゐぜき。
（六）一しきり鳴いてのち鳴かないのを時をへて鳴くといふのであらう。
（七）紫草が根を長くのばしてゐる横野。紫草↓二〇
（八）大阪府中河内郡巽村の地。
（九）もとな我をして物思はしむるといふ意を略していふ。
（一〇）不明。↓二一〇
（一一）住んでをられるし。連用形で輕く止めたいひ方。↓一五
（一二）尾や羽が觸れて。小竹の間でいきいきと動いてゐるさま。
（一三）吉野にある。↓九〇七
（一四）次に、なんとなく春らしい景氣のある意を省略したと見る。

一八九　うち靡く春立ちぬらしわが門の柳のうれに鶯鳴きつ
一九〇　梅の花咲ける岡邊に家居ればともしくもあらず鶯の聲
一九一　春霞流るるなべに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも
一九二　わが背子をなこせの山の呼子鳥君よびかへせ夜の更けぬとに
一九三　朝ゐでに來鳴くかほ鳥汝だにも君に繼ふれや時終へず鳴く
一九四　冬ごもり春さり來らしあしひきの山にも野にもうぐひす鳴くも
一九五　紫草の根ばふ横野の春野には君をかけつつ鶯鳴くも
一九六　春されば妻を求むと鶯の木末を傳ひ鳴きつつもとな
一九七　春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰呼子鳥
一九八　答へぬになよび響めそ呼子鳥佐保の山邊をのぼりくだりに
一九九　梓弓春山ちかく家居らし續ぎて聞くらむ鶯のこゑ
二〇〇　うち靡く春さり來れば小竹のうれに尾羽うち觸れて鶯鳴くも
二〇一　朝霧にしののにぬれて呼子鳥三船の山ゆ鳴き渡る見ゆ

雪を詠める

二〇二　うち靡く春さり來ればしかすがに天雲霧ひ雪はふりつつ

(一五)→二六八六
(一六)そんな筈はないのにと訝る心持。→一七四〇
(一七)かげろふの立つ春となつたのに。
(一八)春がやつて來たわい。
(一九)雪がふり頻つてゐる。
(二〇)左注には「右の一首は…」とあるが、或は前の連作で、「右の二首は…」とあるべきかと思はれる。
(二一)物を贈るのにそれを得る苦勞をいふのはこのころの常である。→一二四九・四四五五
(二二)烏芋(くろくわゐ)。地中の塊莖が食べられるが、その味がゑぐいのでこの名がある。
(二三)梅の花が散つて來るのかと。これで梅を戀ひしがつてゐたことになる。左注の問にあたる。
(二四)美しい雪をさしおいて、梅を戀ひしがりなさるな。
(二五)山に片よりついて住んでゐる君よ。左注の答にあたる。
(二六)昨日年が暮れたばかりであるのに。春日山の霞を詠んでゐるの

梅の花降りおほふ雪をつつみもち君に見せむと取れば消につつ
梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に降りしきりつつ
今更に雪降らめやもかぎろひのもゆる春べとなりにしものを
風まじり雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さりにけり
山のまに鶯鳴きてうち靡く春と思へど雪降りしきぬ
峯の上に降り置ける雪し風のむた此處に散るらし春にはあれども

右の一首は筑波山の作。

君がため山田の澤にゑぐ採むと雪消の水に裳の裾ぬれぬ
梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白たへに沫雪ぞ降る
山高み降り來る雪を梅の花散りかも來ると思ひつるかも　一に云ふ、梅の花咲きかもちると
雪をおきて梅にな戀ひそあしひきの山かたつきて家居せる君

右の二首は問答。

霞を詠める

昨日こそ年はは暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり

は奈良の都の人の作であらう。
（一）鶯の鳴く春の意でつづく。
（二）淺綠の絲を染めてかけてあると。
（三）水邊に多いねこやなぎ。
（四）前のと連作で、河楊の歌と見る。
（五）原文「水飾合」は「水飲合」の誤とし、水がわき立ち互ひにのみ合つて盛に流れるさまを文字に表したものとして「みなぎらふ」と訓んだ。
（六）冬枯の柳で、早くその葉の綠に茂ることを願ふのである。
（七）美しさよ。くはしはほめていふ語。→三三三〇・三三三一
（八）亂れぬその間に。→一三五九
（九）かづらにしてゐる。枕を動詞にして「まくらく」といふと同じく、かづらを動詞にして「かづらく」といふ。
（一〇）時がやつて來てゐる。
（一一）目に見える身の宿るこの世の人である君の意。

一八四四　冬過ぎて春來るらし朝日さす春日の山に霞たなびく
一八四五　（一）鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども

柳を詠める

一八四六　霜枯の冬の柳は見る人の纏にすべくもえにけるかも
一八四七　（二）淺綠染めかけたりと見るまでに春の柳はもえにけるかも
一八四八　山のまに雪は降りつつしかすがにこの河楊はもえにけるかも
一八四九　（四）山のまの雪は消ざるをみなぎらふ（五）川にしそへばもえにけるかも
一八五〇　毎朝わが見る柳（六）うぐひすの來居（八）て鳴くべき森に早なれ
一八五一　青柳の絲のくはしさ（七）春風に亂れぬ間に見せむ子もがも
一八五二　ももしきの大宮人の纏けるしだり柳は見れど飽かぬかも
一八五三　梅の花取り持ち見ればわがやどの柳の眉し思ほゆるかも

花を詠める

一八五四　鶯の木傳ふ梅のうつろへば櫻の花の時かたまけぬ（一〇）
一八五五　櫻花時は過ぎねど見る人の戀の盛と今し散るらむ
一八五六　わがさせる柳の絲を吹き亂る風にか妹が梅の散るらむ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo